

南箕輪村小学校外国語活動及び中学校外国語教育推進方針

文部科学省は、平成25年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定し、その中で、小学校中学年から外国語活動実施、小学校高学年の教科化、中学校英語の高度化等を打ち出しています。

南箕輪村では、令和2年度から実施の新学習指導要領内容を踏まえた外国語活動・教育の改善・充実を図っており、引き続き外国語教育推進に向けて取り組んでいく予定です。

【小学校外国語活動】

◎外国語の見方・考え方を働かせ、コミュニケーションの目的を理解し、見通しを持って目的を実現するための活動を通して、聞いたり話したりすることに慣れ親しませ、コミュニケーション能力の素地となる資質・能力を育成する。（中学年）

◎外国語の見方・考え方を働かせ、コミュニケーションの目的を理解し、見通しを持って目的を実現するための言語活動を通して、聞いたり話したりするとともに、読んだり書いたりすることに慣れ親しませ、コミュニケーション能力の基礎となる資質・能力を育成する。（高学年）

●コミュニケーション能力の素地・基礎を養うことを目指して、4つの活動を大切に考えます。

（1）積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる活動

- ・児童にとって身近な話題について、積極的にコミュニケーションを図る楽しさを体験する。
- ・積極的に外国語を聞いたり、話したりする。
- ・相手に配慮しながら外国語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知る。

（2）日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深める活動

- ・日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付く。
- ・異なる文化をもつ人々との交流体験等から、自他の文化等の理解を深める。

（3）自分で考え、表現する力を身に付ける活動

- ・ALT等とのコミュニケーション活動を通じて、自分の好きなことや身近で簡単なことを主体的に考え、伝える力を身に付ける。

(4) 外国語の音声やリズム・文字などに慣れ親しみ、日本語との違いを知り、言葉の仕組みに気付く活動（知識・技能の獲得）

- ・外国語で歌ったりチャンツをしたりすることを通して、外国語特有のリズムやイントネーションを体得し、日本語と外国語との音声の違いに気付く。

- ・日本語にない音に触れたり、慣れ親しんだりすることを通して、言語についての興味・関心を高める。

- ・アルファベットの文字や単語などの認識をし、語順の違いなどの文構造への気付きなど、言葉の仕組みを理解する。

●学級担任の先生が自信をもって主体的に取り組めることを目指します。

学級担任は児童の興味・関心をよく把握している。また、児童にとって身近な存在であり、外国語の学習者としての見本でもある。児童が親しみを感じ、安心して学習に取り組める環境づくりができる等、学級担任が教える利点を活かすために、次のようなことに配慮し、授業をマネジメントしていくことが大切である。

① 学級に合った場面設定を考える

- ・児童にとって外国語を使ったコミュニケーションへの意欲関心を高めることができるような「場」を設定する。

- ・コミュニケーション活動や、異文化理解につながる活動を通して、外国語や外国の文化などに対する理解を深めていくことのできる活動を考える。

- ・国語科、音楽科、図画工作科などの他教科との連携を意識し、児童が学習したことをそれぞれの授業の中で活用するなどの工夫をする。

② 学級担任が外国語を使う学習者のモデルとなる

- ・児童が聞いたことのある表現や身近な内容について、外国語を用いてALTに伝える姿を見せる。

- ・ジェスチャーやアイコンタクトなどを用いて積極的に話す姿を見せる。

③ クラスルーム・イングリッシュを積極的に使う

- ・授業の中で繰り返し、あいさつの表現や簡単な指示、簡単な言葉をテンポよく使うことで、生徒が外国語を聞き、音声やリズムに慣れ、意味をとらえられるようにする。

- ・児童を誉める言葉を笑顔とともに積極的に使用するようにし、児童が外国語を通じて、相手意識をもってコミュニケーションを図ることができるよう支援する。

●児童につけたい力をつけるための授業づくりを目指します。

① 児童が見通しをもって学習活動に取り組めるよう、児童と単元のゴールを共有す

る

単元の目標を明確にし、単元の終わりに何ができるようになるのかが児童にわかるようにする。例えば、ゲームなどでは活動すること自体を目的とはせず、「1年生に学校紹介をするために、『表情やジェスチャー』などを加えて、相手に気持ちを伝える力を身につけることが目標である」といったように、活動に意味を持たせ、児童と目標を共有する。単元を通したゴールを設定することで、毎時間の活動に対し児童一人ひとりに“めあて”を持たせ、活動に対して主体的、意欲的に取り組むことができる姿が期待できる。

また、毎時間授業の最後に、その時間にどんなことをして何ができるようになったのか、わかったことは何かを振り返ることで、児童は学習の過程で身につけた力を実感し、次の活動に対する意欲関心を高めることができる。

② 学習形態を工夫する

外国語で抵抗なく話することができる児童もいれば、苦手意識をもつ児童もいる。個人、ペア、グループ、クラス全体等、学習形態を工夫することで全ての児童が発話しやすい状況を意識的に作るようにすることが大切である。

③ デモンストレーションをする

ALT等と、どのように活動を行えばよいのか見本を示す。特に、表現・会話活動を行う場合、デモンストレーションなどのモデルを示すことで、日常の実際の場面に近い外国語によるコミュニケーションの場面を児童にイメージさせることができる。

④ 児童の理解の状況に応じ、必要な場合は日本語で話す等の補助を行う

児童の様子をよく見ながら、理解ができていないと感じたときには日本語を加えて説明したり、簡単な表現に言い換えたりするなど、全児童が何を活動するのかを理解した上で、授業を進めるようにする。

⑤ 繰り返し指導する

めあてやふりかえりを細やかに行うことで、児童が外国語活動の時間を通してどのようなことができるようになったのか実感できるように留意する。また、学習したことの定着をはかるため、根気強い繰り返し練習だけでなく、学んだことを活用したコミュニケーション活動とともに、歌やチャンツ、絵カード等の教材も活用して、リズムよく進めることで児童が楽しく集中して取り組めるように心掛ける。

⑥ 外国語を用いて伝えたい学習内容を考える

今まで知らなかったことがわかったり、生徒同士や教師・ALTとのやりとりの中で互いのことや考え・気持ちを伝えあったり、日本や外国の文化の新たな一面を発見したりするなど、児童が学習を通して気付き、感じたことや学んだことを積極的に伝えたいと感じられるような場面を設定する。

【中学校外国語教育】

◎外国語の見方・考え方を働かせ、コミュニケーションの目的を理解し、見通しを持って目的を実現するために、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことによる総合的な言語活動を行うことを通して、簡単な情報や考えなどを外国語で理解したり表現したり伝え合ったりすることができる資質・能力を育成する。

●身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養うため、3つの事柄を大切に考えます。

(1) 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深める

- ・言語の働きや役割などがわかるようになる。
- ・言語の背景にある文化を尊重しようとする態度を育てる。
- ・自分たちの言語や文化に対する理解も合わせて深めるとともに、そのよさなどを積極的に発信しようとする意欲を高める。

(2) 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

- ・音声、語彙、表現、文法の知識を身に付けさせ、実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行う。
- ・具体的な目的・場面や状況に応じて情報や考えなどを適切に表現してコミュニケーションを図る。

(3) 聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどについて、実際のコミュニケーションにおいて運用することができる能力をバランスよく身に付ける

- ・外国語を聞いて、内容や話し手の意向などを正しく理解できる。
- ・外国語を用いて、身近な話題について、得た情報や自分の考え・気持ちなどを話すことができるようにする。
- ・外国語を読むことに慣れ親しみ、英語を読んでそこに書かれた情報や概要、書き手の意向などを理解できる。
- ・外国語を書くことに慣れ親しみ、英語を用いて自分の考えなどの身近なことについて構成を意識しながらある程度まとまった量の文を書くことができる。

●技能の知識・技能を総合的に活用して思考・判断・表現する力を育みます。

現行の学習指導要領では、4技能を総合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する指導が求められている。複数の技能を関連づけ、実際のコミュニケーションの場面を想定し、「活用」を意識した活動を設定する。

総合的な活動を行う場合には、ゴールに向けて各活動がつながっている必要がある。各学年や3年間の到達目標に向けて、いつまでにどのような力を身につけておかなければならないか、年間指導計画の中で押さえていくことが大切である。また、1時間の授業においても同様に、つけたい力を明確にした上で活動を選び、手立てを考えていくことが大切である。到達目標に向けて、つながりのある活動でステップアップしながら力をつけていけるようにしたい。

- ・聞いたり読んだりして得た情報（英文や図表など）について、その概要や要点を適切に把握するとともに、自分の意見を話したり、感想、賛否やその理由などを話したり書いたりする力を身に付ける。
- ・スピーチやプレゼンテーションなどのタスクを設定して4技能を指導する。
- ・インタビュー活動やその他のコミュニケーション活動などを取り入れて4技能を指導する。外国語を読んだり聞いたりして得た情報からわかったことや自分の感想を書いたり、自分の意見を伝えたりするなど、インタラクション（やりとり）する力を身に付ける。インタビューなどのパフォーマンステストも積極的に行っていく。

●「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標を設定し、主体的な学習を目指します。

「CAN-DOリスト」は、各学年、各学期、各単元、各授業では「外国語を使って実際に何ができるようになればいいのか」を生徒の視点で表した具体的な目標である。

「CAN-DOリスト」の形で学習到達目標を設定することにより、生徒がめあてを持って学習に臨むことができるとともに、教員と生徒が目標を共有することで、日々の学習活動に系統性と必然性を持たせ、生徒の主体的に取り組もうとする態度・姿勢を育むものである。

学校は、各校の「CAN-DOリスト」に基づいて、聞くこと、話すこと、読むこと及び書くことを評価し、その結果により、生徒の定着度を的確に把握することができる。

中学校において、ALTを含め、外国語担当教員等で、生徒の実態を考慮しながら「外国語を使って何ができるようになるか」を検討し、指導と評価の方法を共有していくことが必要である。

【小中連携の推進】

これまでの小学校外国語活動では、外国語の音声や表現に慣れ親しむことが目標とされ、スキルの習得・定着は求められてこなかった。しかし一方で、中学校では、コミュニケーション能力の基礎、すなわち、聞いたり話したり読んだり書いたりするスキルの習得・定着が求められ、小中間の学習におけるスムーズな接続が課題であった。

外国語活動で慣れ親しんだ外国語の音声や文字、表現をうまく活用しながら、中学校

では正確さ・適切さを意識させる指導を行うとともに、読むこと、書くこと、聞くこと、話すことに係る統合的な言語活動を通して、より実践的で豊かなコミュニケーションを目指していくことが大切である。

小学校外国語活動と中学校の外国語教育を接続し、子どもたちが「小学校でやったことが中学校でも役に立つ」と実感できるようにすることが大切であり、そのために小学校外国語活動と中学校の外国語教育をつなぐ必要がある。

小中連携、小学校連携については、児童生徒の実態を踏まえて段階的に進めていく。

① 情報交換をする

小学校・中学校の互いの取組みを知り合う。例えば、小学校教員と中学校外国語科教員とが外国語活動と中学校外国語科について、児童生徒の状況、学習内容、教材、指導アイデア等について情報交換を行い、指導に活かしていく。

② 交流をする

「小学校教員と生徒」「中学校教員と児童」「小・中学校の教員同士」「児童と生徒」など、子どもたちの実態に応じて取り組んでいく。

例えば、総合学習の時間などを活用し、「児童と生徒」において交流会を行い、互いの学んだことを発表することも考えられる。中学生には日頃の学習成果を披露する場となり、児童にとっては中学校英語へのあこがれをもつよい機会となる。

③ カリキュラムの連携

小中連携においては、目標の一貫性、学習内容の系統性、指導法の継続性が重要である。小学校外国語活動で取り組んだ言語の使用場面や言語の働き(下記参照)を意識した「聞くこと」「話すこと」の言語活動を入れながら、聞いたり話したりする力(スキルの習得・定着)を育成していく。あわせて「読むこと」「書くこと」を統合的に活用した言語活動の取組を通して、コミュニケーション能力の基礎を養う。

【放課後こども教室：放課後学習との連携】

未来の日本を創る心豊かでたくましい子供を社会全体で育むための一環として、家庭、学校、地域の連携は欠かせない。具体的な活動のひとつとして、地域の大人の協力を得て、学校等を活用し、緊急かつ計画的に子供たちの活動拠点(居場所)を確保し、放課後こども教室の充実を図ることが挙げられる。また、英語教育を交え、放課後や週末等における様々な体験活動や地域住民との交流活動等を支援する。

児童生徒が興味を持って主体的に放課後学習活動に参加でき、地域住民とのコミュニケーションを通じて、自己表現や他者との学び合い高め合うための手立てとして、今後一層の放課後こども教室を充実していく。

【ICTの活用】

これからの子どもたちに求められる資質・能力を育成するための重要な方策の一つとして、ICT の活用が挙げられる。電子黒板やタブレット端末、デジタルテキスト等を効果的に活用し、教材づくりや適切な ICT の活用・課題設定等の工夫をしていく。児童生徒が興味を持って主体的に学習活動に参加でき、自己表現や他者とのコミュニケーションを通じて学び合い高め合うための手立てとして、今後一層の活用を目指していく。